

解題

中地 義和

本稿は、パリ第4大学のピエール・ブリュネル教授(1939-)が、フランス政府の公式派遣使節として本年6月に3度目の来日をされた際、東京大学本郷キャンパスにおいて行った同題の講演(6月5日)のもとになったテキストである。

周知のとおり、ブリュネル氏はクローデル研究から出発し、若くしてソルボンヌ教授に就任、比較文学・フランス文学の両分野をまたいで幅広い活躍をされている。著作は数多く、また多岐にわたる。インターネット上の検索によれば、校訂本を含め、氏の関係する書物で現在入手可能なものは44冊にのぼるが、それらは、(1)クローデル、ランボーを中心とする個別作家研究、

(2)いわゆる「神話批評」の著作、(3)比較文学・文学史をめぐる著作、(4)フランス現代文学への目配り、(5)音楽家・音楽史をめぐる著作、に大別される。なかでも、本講演の対象となったランボーは、氏の関心の中心を占める詩人で、1973年刊の *Rimbaud*, Hâtier, Coll. Théma / Anthologie を皮切りに、研究書・校訂本を合わせると十指に余る。そのうち、とくに重要なのは、*Arthur Rimbaud ou l'éclatant désastre*, Champ Vallon ; *Rimbaud-Projets et réalisations*, Champion-Slatkine, Coll. Uni-champ (ともに1983)、『地獄の季節』に関する唯一の批評校訂版 (*Une Saison en enfer*, Corti, 1987)、そして最近刊行された大部の論集 *Rimbaud sans occultisme*, Schena-Didier Érudition, 2000. の4冊である。

近年のブリュネル氏は、その年のアグレガシオンの対象となる近代作家について、手引書あるいはそれ以上の専門性を帯びた研究書を出版しており、昨年度の課題作品となったラフォルグ『嘆き節』についても、*Dictionnaire pour l'étude des Complaintes de Jules Laforgue* および *Lectures d'une œuvre : Les Complaintes de Jules Laforgue. Études réunies par Pierre Brunel* (ともに Éditions du Temps, 2000) の2冊を刊行した。折りしも、スイスの Âge d'homme 社が1980年代に開始した『ラフォルグ全集』全3巻の刊行が最近ようやく完了した。

本講演は、氏の長年の研究対象であるランボーとアクチュアルな話題性をもつラフォルグとの比較論考であるが、その動機付けは、このふたりがともにフランス近代詩に根本的な革新をもたらした詩人であり、しかもマラルメ

ーヴァレリーの主知的系譜とは異なるもうひとつの系譜を形成しているという点にとどまらない。ランボーが文学を放棄して 10 年以上の歳月が流れた 1886 年の春から秋にかけて、ギュスターフ・カーンを主幹とする象徴派の雑誌 *La Vogue* が彼の作品を分載する。『イリュミナシオン』の散文詩がそこではじめて一般読者の目に供され、13 年前に刷り上がっていたものの著者取り分の何部かがごく少数の友人に配られただけで残りはお蔵入りになっていた『地獄の季節』が改めて発表され、多数の韻文詩がはじめて印刷に付される。1872 年のいわゆる「後期韻文詩」が『イリュミナシオン』に紛れ込んだり、ふたつの散文詩がひとつに結合されたりする校訂上の不手際もあったが、詩人ランボーを発掘するうえで、この雑誌が果たした役割は計り知れない。これがなければ、ヴェルレーヌの真摯な紹介の努力にもかかわらず、ランボーが今日のような知名度を得ていたかどうか定かではないのである。もっとも、当時フランスを遠く離れてアラビアとアフリカを行き来していた商人ランボーは、パリ詩壇での評判を耳にしても、まったく無関心に聞き流したのであったが。時を同じくして、ラフォオルグもこの「ラ・ヴォーグ」誌に自作を発表しはじめる。そのなかには、詩のみならず『伝説的教訓劇』の諸篇やホイットマンの訳詩も含まれていた。1854 年生まれのランボーと 1860 年生まれのラフォオルグはほぼ同世代と言えるであろうが、一方は早々と詩の可能性を極め、文学の外へと突き抜けていった亡霊のような伝説的詩人、他方はこれから文名を馳せようという気鋭の詩人であった。

ブリュネル氏の考察は、両者の出会いの場となった「ラ・ヴォーグ」誌上にそれぞれの作品が掲載された経緯を逐一確認したうえで、同一テーマを扱う両者が見せる対照的な感性をあぶり出し、ラフォオルグがランボーの作品から触発されたものを注意深く推量するものである。「ラ・ヴォーグ」誌というトポスを除けば、ランボーをめぐるラフォオルグのコメントは稀少であり、当時いわば「時代の風」であった自由詩の実践における一方から他方への影響も確定しがたく、両者の比較はけっして容易な作業ではない。しかしブリュネル氏は慎重な手つきのなかにも、ランボーの散文詩「花」とラフォオルグの散文作品「水族館」を読み比べながら、生命力の飛翔に向かう前者の花と、隠微なニルヴァーナに咲く化石を思わせる後者の花の対照を指摘し、『地獄の季節』の「錯乱 I、愚かな処女」に見られる内面劇の暴力的外化がラフォオルグ的「嘆き」といかにかけ離れているかを鮮やかに示された。ふたりの親近性、系譜学よりは、むしろ詩的・実存的感性のコントラストを強調する論考になっている。

筆者には、ラフォルグの革命的な新しさとも言える「卑近なもの」(le trivial) の詩への取り込みが、初期ランボウの瀆聖的な韻文詩あたりにひとつの淵源をもっているように思われ、そうした詩史的展望からの補完が今後試みられてしかるべきだと考える。日本フランス語フランス文学会における現代フランス文学の俯瞰を試みた開会講演(6月2日)と合わせて、多大な示唆と触発を与えてくださったブリュネル教授に感謝したい。